

369

特 240

17

後藤蒼洋著

臨戦諮問録

支那事情研究会



2

0055502-000

特 240-17

臨戦諮問録

後藤蒼洋・著

支那事情研究会

昭和 13

AJA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権第67条の規定に基づき、平成12年3月付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

序

一、余は事變の當初から第一線の將兵と其苦樂を俱にし、全戦線を訪ふたことも一再ではない、この體驗を基礎として筆を執つたのであるが、事軍機に觸れる虞れある事柄に就ては、一切之を割愛しなければならぬ爲に、充されざるもの多々あることを遺憾とする、讀者諸賢の御諒恕を得ば幸甚である。

一、皇軍將士の奮闘に就ては新聞や雜誌に報導されて餘すところが無い、故に余は戦地にも銃後にも、知るが如くにして—しかも明瞭を缺くが如き憾ある、臨戦認識の主要題目を捕へることにした。

一、客觀的取材に依り歸納的結論に於て、我等日本人の進むべき余の信念を表し、而して同胞各位の參考に供すると共に、共鳴を求めて切々たるものがある。

一、紙數に限り有る爲割愛するに忍びざる事柄をも忍んだ再稿を約して攔筆する。

著

者





臨戰諮問録

目次

何が故に宣戦の布告を爲さるるか？……………(一)

國家總動員とは如何なることか？……………(七)

日支事變は何時終るか？……………(一三)

防空に就て國家國民に促す……………(二四)

戦争は常識の圏外なり……………(三五)

偉大なり我等の制海權……………(三七)

最後の勝利は武器か肉弾か？……………(四一)

露營の一夜……………(四三)

現地支那民衆の心……………(四)

- (一) 現在沒有法子 〓今は仕方が無い
- (二) 支那兵よりは日本兵の方が善い
- (三) 看板の塗替と保身術
- (四) 前進主義の支那人
- (五) 感心な治安維持會
- (六) 日章旗を樹てる心理
- (七) 共產思想と皇化思想
- (八) 支那兵に對する認識の是正
- (九) 日本人がつり上げる物價
- (十) 略奪の跡を見る
- (十一) 日本語熱

戦地より銃後の國民に語る……………(六)

- (一) 強敵無水
- (二) 慰問袋
- (三) 煙草
- (四) 支那風呂
- (五) 勤務様々

臨戦諮問録

何が故に宣戦の布告を爲さるるか？



陸に海に空に國を擧げての戦闘を展開してお
りながら、何が故に宣戦を布告しないのである
か？、全日本の國民は其理由を知りたいと欲し
てゐる、其希望に對して余は余の私見を述べて
以て一般國民の參考に供せんとする。

(一) 侵略者の汚名を排す

日本が最後の決意を以て國際聯盟の總會に臨んだ時、我等の全權松岡洋右氏は其席

上に於て「支那は完全なる國家に非ず」と叫んだのである、勿論全世界の各國も支那が日本と同格の國家であるとは思つてゐない、換言すれば支那は日本より一等下の國であると思つてゐる、日本が英・米・佛・露の如き國に對して宣戰を布告するのであるならば、對等の立場として何の不思議もないのであるが、日本から——一等下の國であると解されてゐる支那に對して宣戰を布告することは「弱者に對する侵略主義者である」との汚名を着せられることになるのであつて、斯の如きことは光輝ある我國の國是と歴史と日本精神とに照して吾人の忍び得ざるところであり、又斯の如き印象を世界人士の頭に殘すことは極力之を避けなければならぬのである。

(二) 大義名分の明示

我國が今正義の劍を揮つて討たんとするものは、支那四億の民衆に非ず、又四百餘洲の領土でも無いのであつて、其討たんとする目標は、聯ソ容共の策を探り、血で血を洗ふ革命に走り、教育の統制に依つて抗日思想を培養し、或は政治形態の萬般に組

み入れて、對日戰備をこれ事とし、以て我等が念願する東洋平和の建設に仇を成す支那の國民黨Ⅱ即ち南京政權なのである、これこそ我等が大義名分を明示する金科玉條である。大義名分の立たざる戦争が概ね慘敗の歴史を残してゐることは古今東西を通じて明らかなる事實である、この事實は臨戦日本に對し明鏡の如き教訓であることを知り、而して之に善處しなければならぬ。即ち日本が今支那に對して宣戰を布告したならば、支那四億の民衆と四百餘洲の領土を討つこと、成り、重要な日本の大義名分が不明瞭になる虞れがあり、惹いては臨戦基礎思想の上に由々しい錯覺を生ずする虞れがあるから、本項の内容は極めて慎重な態度を以て取扱はなければならぬ事柄である。

(三) 大戦の放火を避けて子孫を想ふ

今我國が支那に宣戰を布告すれば世界は三色に色分けされるのである、即ち支那に味方をする國と、日本に味方をする國と、中立を宣言する國との三色に分れ、その支

那に味方する國と日本に味方する國とは對立して敵對行動に出で、所謂第三の世界大戦を惹起する危険な状態に突き進むのである、もしそれ斯の如く成らんか「日本は第二の世界大戦の放火犯人なり」との汚名を着せられ、光輝ある皇國日本の歴史を汚すばかりでなく、天壤無窮の御稜威に抱かれる我等の子孫が、國際間に處する上に於て幾多の迷惑を蒙らねばならぬであらうことを考へてやらねばならない、これ即ち現代の我等が負ふべき義務であり責任であることを自覺して、この事態に善處しなければならぬ。

(四) 平時と戦時の國際法に觀る

我國の現在は平時國際法の支配範圍に在るのであるから、如何なる國から如何なる物品を購入しても、又賣渡しても、如何なる國からも故障は起つて來ないのである。即ち平和の裡に國際間の貿易が行はれてゐるのであるが、一ト度日本が宣戦を布告しなならば、同時に戦時國際法の支配下に入るるのであつて、列國と平和な貿易を自由に

續けることが出來なくなつてくるのである、平和を國是とする日本が、何を好んで戦時國際法の火中に飛込むの愚を敢てするの必要があらうか、出來得る限り之を避け、而して環境の情勢を知悉し、現在の態度を以て進むことが最も賢明なる行方であると考へる、現時の國民は餘儀無い事態の起らざる限り、この態度を支持しなければならぬことを自覺すべきである。

(五) 現代戦と宣戦の取扱ひ

現代の戦争は肉弾—思想—經濟の三部門から成立する、従つてこの三つの戦争要素は走馬燈の如く間斷なく、或は陰に或は陽に展開しつゝある、精神文明を棄てた西歐の物質文明は人類をして終り無き闘争の巷に追込んで終つたのであつて、物質を目標とした人類の醜惡なる生存競争は、爾今全面的な世界平和の絶望を叫ばしめるのである、換言すれば吾人は「今後全地球の表面に戦争が絶えると云ふことは絶對に無い」と斷言するのである。この様な世相であるから戦争の始りと終りとを判定することが

殆ど不可能になつた、従つて宣戦を布告する機會も平和の克復を宣言する時機も容易に擱むことが出來ないのであつて、今後の世界には從來の戦争様式なるものが抹消されるであらう、否既に抹消されてゐるのである。單り今度の日支事變に宣戦の布告を見ないばかりでなく、イタリーがエチオピアと戦つた時も、スペインの内亂に關係を持つ列國の間にも、事實上其國の國民が參戦し、或は陰陽波濤の外交策謀が縦横に施され、砲火は十字に飛んでゐるけれども、世界の何處からも宣戦布告の聲は聞えて來ないのであつて、我國が其舉に出ないのも世界時勢の致すところであり、敢て異とすべきものではないのである。

6

(六) 現状のまゝで進め

以上各項の理由に鑑みて宣戦の布告を爲さざるものであり、今後と雖も宣戦布告をすることの已むに已まれぬ勢とならざる限り、從來の態度を持してそれ〴〵の時局に善處することが、時宜に適した國家國民の處置であることを諒解し、而して之を支持

すべきである。

國家總動員とは如何なることか？

現代戦が肉弾、思想、經濟の三部門から成立してゐることは別項にも述べた通りであるが、然らば日本は何時から戦闘を開始したのであらうか？、

(一) 陰陽波濤の思想戦

先づ以て思想戦から覗いて見る、赤露がロマノフ王朝を滅してコミンテルンの活動を始め、我等が保有する日本の國家主義を破壊して、彼等が理想の共產主義を實行しやうと眞向から切込んで來てから恰度二十年の月日は流れた、この間憲兵―警察―司法の任務當局は、之が防禦の城壁と成り砲彈と成つて戦ひ、全國民は擧げて防戦これ努めて來たのである。

吾等は非常時日本の一國民として、赤色思想の襲來した時代を顧み、轉た戦慄を催

ふせざるを得ない、想へばあの頃カーキ色服の軍人を見て「世にも馬鹿氣た人殺しの練習をする職業がある」等と嘲笑し、或は電車の中で軍人や警官を見てその佩刀を弄し「人切り庖丁」と揶揄する等、この言語道斷な行爲が帝都の眞只中に平然と行はれ、青年學徒の輩が得意を氣取り、しかも國民は何等異とするところがなかつたのである、當時心有る者は或は慨き或は憤り、國家の前途を深く憂ひたのであつた。

當時我國は滔々たる拜白自由の潮流に押し流され、世界最大の秘密結社フリーメイソンの魔手は大手を振つて我等が日本を翻奔し來り、大和民族危急存亡の秋を思はしめたのであつた、この間に處して憂國臣民の胸には純正日本主義が猛然と燃え上つてゐた、その頃支那の排日と之に伴ふ第三國の策動、張作霖一家の對日不信、ロンドン會議の失敗等々、世界の氣勢と極東の情勢は暗愴として危險の度を増して行つた、果然滿洲の柳條溝に於て一發の爆音が響き渡つた、燃え盛る日本國民の愛國心に油が注がれた、そして舉國一致國際聯盟の脱退を決意し、名を正義と平和に藉りて自我慾伸張の具と爲す、厄介至極な存在、國家群像の羈絆を斷つて、獨立自主の爆彈を世界に

投げつけたのである。

茲に於て純正日本の姿はハッキリと世界の前に浮び上つた、そして其力は電波の如く活動し始めた、この電波の如き力は日本を中軸とする世界歴史の展開を創造した、嗚呼！偉大なる大和民族よ！、我等は偉大なる民族力に依つて思想の敵を完全に擊破したのである。事ある毎に躍進するのが我等の偉大な民族力であるのだ、おゝ！、我等は幸福な國民である、この幸福こそは一天萬乘の 天皇陛下おはします、日本國民のみが味ふ恵天である、我等は感謝しなければならぬ、赤化と白化の總攻撃に對し、固有の思想自力を以て思想戰に勝つたのだ、この感謝と勝つた力を以て、支那の良民を助けつゝ東洋平和の確立に向つて驀進しなければならぬ。

(二) 起ち上つた日本の經濟戰

肉彈の勇者にのみ最後の勝利を與へないのが現代戰の一特色である、肉彈戰に於て如何なる快勝を博しても經濟戰や思想戰に敗れた場合、それは完全なる敗戰國と成り

終るのである。

今や世界の經濟は一元であつて、或一國の孤立を許さない、従つて持つ國と持たざる國との間に貿易が行はれ、この貿易場裡に於て烈しい競争が行はれる、これは蓋し當然の事像である、物無くしては何事も爲し得ない現代人類の生存は、物質の有無に依つて勝敗が決すると云つても過言ではない、(但し精神力を無視するに非ず)然らば我國經濟戰の現勢は如何であるか、我等國民は滿洲事變を契機として「非常時來る！」と總立に立ち上つた、そして各々其業に萬全を傾倒した、この活動力は驚くべき産業の勃興と成つて現れた、そしてその生産品は津波の如く海外へと押し寄せて行つた、列國はこの勢ひに恐怖を感じ、如何にかしてこれを阻止せんものと、或は輸入を禁止し、或は制限し、或は割當制を試み、或は爲替管理を行ふ等、あらゆる手段を以て榮え行く我等の産業に對し抗戰し來つたのである、しかし人間生活は議論では無く實際である、生産費用が低廉であつて然も品質がよい日本品は、官民當事者の協同努力に依り、如何なる關所をも突破して世界の市場へ縦横に進出しつゝある、我國が非常時

態勢下に經濟戰の火蓋を切つてから既に七ヶ年の星霜を閲したのであるが、去る昭和十一年度に於て十七億八千萬圓といふ、有史以來最大の貿易に成功してゐる一事實は何の證左であるか、それは年一年と勝利の階段を昇り行く、努力日本に興へられた經濟戰の凱歌関の聲である。

(三) 人間を超越した我肉彈戰

肉彈戰に至つてはこゝに筆を執る迄も無く、昭和六年滿洲に爆音が響いて以來、熱河に北滿に更に第一次上海事變に、今は全支那の陸に海に空に、戰つて戰つて戦ひ抜いてゐるのであつて、皇軍が赫々たる武勳と堂々たる正義の戰果を收めつゝある事は天下周知の事實であるから、こゝに多くを語る必要もあるまいからこれを割愛する。

(四) 舉國戰場Ⅱ戰闘員

斯く觀じ來る時に、日本が現代戰に参加を餘儀なくされてから二十年の日子は流れ

たのである、この現代戦の態勢から見ると、今肉弾第一線に立つてゐる戦闘員は勿論肉弾戦の第一戦の戦闘員であるが、経済戦の上から見ると、野に出て働く老農夫も、工場に糸を績ぐ若き一女性も、町に商ふ丁稚小僧も、これまた経済戦上第一線の戦闘員である、更に思想戦の上から見ると、單に司法官や警察や憲兵の如く直接執掌する當局ばかりで無く、教育當局者や宗教家を始めとして全日本の國民舉つて第一戦の戰鬥員といふことになるのである。

加ふるに文明の兵器は發達して其止まるところを知らない、例へば飛行機の航續力が三千軒を突破するに至つた、だから何時何處に爆彈が投下されるかも知れない状態に在る、何時爆彈を見舞はれるか判らない處に居つて「此處は後方でありませう」等といつてゐる譯には行かなくなつたのである。

此事情からすれば一旦緩急有る場合、國の領土を舉げて臨戦地帯即ち第一線と成るのであり、全國民は舉げて第一線の戦闘員と成るのである、この状態を稱して國家總動員と云ふのであり、この國家總動員に當つて各々其本分を盡す爲に、より良き効

果を收める上の手段を定め、認識を確立し、而して堅忍不拔の覺悟を決する、これを國民精神總動員と稱するのである。

日本國民たる者は、この本義を感得して、其如何なる立場であるかを論ずること無く、大堤の崩れるのは物の數ならぬ蟻孔からであることを心得、事は小なれども任務は重い、この一念を以て屈せず撓まず御奉公の實を致さなければならぬ。

日支事變は何時終るか？

(一) 原因は深遠である

日支事變の因つて來る所以は一朝一夕の故に基くものではなく、實に深く且つ廣いのである、遠くは日清戦役の三國干渉問題に始まり、外交方面では名を平和に藉りたパリ會議、それから名を軍備の縮少に隠れたワシントン會議、更に同様の名に於て開かれたロンドン會議、この世界三大會議の裏に形成された支那の拜白侮日的思想の

潮流が日支事變の温床と成り、其主流が支那をして打倒帝國の鋒先を日本に集中せしめたものであり、集中されたる鋒先の活動が支那の内政に排日¹¹ 侮日¹² 抗日の活動となり、其活動が青天白日旗の下に教育化され、教育に依つて培養された思想が爆破して日支事變となつたのであるから、こゝに容易ならざる根底があり、戦慄すべき危険が包藏され、事件の重大性が潜んでゐるのである。

余は昭和十一年の秋「戦慄すべき排日教科書の内容」と題する小冊子を全日本の同胞に贈つて警鐘を鳴らし、同時に親愛なるべき支那四億の民衆に忠告を發し、更に堂々の言を以て支那の國民黨¹³ 南京政權¹⁴ 蔣介石一派に對し「抗日の迷夢より覺めざれば破邪顯正の劍下らん」の題下に總退却を逼つたのであるが、不幸にして遂に今日の事態となつて終つたのである。

(二) 責任の所在と我態度

前述の如き原因に基いて、事の起りは蘆溝橋に於ける一發の銃聲である、この銃聲

は何人の手に依つて放たれたか？、我等同胞の中には之を究めんとする者も相當に有る様であるが、之を究めるの必要は毛頭無いのである、何んとなれば、セルビアの青年が放つた一發のピストルは前後數ヶ年の間全世界に慘禍漲る大戦争を捲起した、柳條溝に於ける一聲の爆音は大滿洲帝國の誕生となつた、今又蘆溝橋に於ける一發の銃聲は東亞に蒙々たる戦塵を吹上げ、今や全世界に波紋を及ぼさずんば止まぬ勢を示してゐる、即ち一發の銃聲を誰が放つたか？が國際間に於て責任所在の問題と成るのでは無く、一發の銃聲を放つたが爲に、斯くも大事件とならなければならなかつた環境の空氣¹⁵ 即ち勢を誰が作つたか？、それが責任を負ふべき所在を決定する眼目と成るのである。

この見地からすれば日支事變の責任を負ふべき者は、普通教育六年の間に用ゐられる五十二冊の教科書中「日本と戦ふべし」の教材を五百七十四ヶ所に織込み、親友たるべき四億の民衆を狂人の如き抗日思想に育て上げた、國民黨¹⁶ 南京政權であることは言を俟たないのである。

然るにも關らず彼れ國民黨は、自己の非を棚に上げて我等日本を侵略主義者と罵り、拜白依存を事とし、聯ソ容共に耽つて自滅を忘れ、遠交近攻の謀略と以夷制夷の術策を弄し、東洋平和の攪亂に日もこれ足りない狂態を演じてゐるのである、之に對して我國は：子に訓ふる親としての情誼もつくした、師が子弟に對する誠心からの教訓も補導も試みた、更に朋友としての忠告もした、先進國としての信義から善意に基く警告もした、愛すればこそ最後の通告も發した、正義日本としての探るべき手段は取り盡したのであるが、革命に酔へる迷夢は如何にしても覺めやうとはしないのである、最早探るべき手段は盡きて終つた、之を討ち之を膺懲しなければならぬ、之こそ支那を救へ日本が生きる唯一無二の道であるのだ、故に所謂侵略主義者でも無ければ好戰罪惡の國でもないことは勿論であり、この度の戦こそは正義日本が責任を以て果さねばならぬ天與の使命に基くものである。

(三) 事變の特異性と我等の使命

過去に於ける日清日露の戦は、理不盡に壓迫し來る相手國の非道に對して臥薪嘗膽涙を吞んで苦節十年憾み重なる民族的悲憤の爆發であつたのであるが、この度の戦は東洋平和の礎を築く爲に、先づ虐げられる支那の國民大衆を救ひ、更に背後より襲ひ掛る赤魔を討ち、指導者と成つて東洋平和を永遠に確立し、我等が持つ 皇道日本の正義精神を以て、全世界の人類を抱擁し、上 御一人のしろしめし給ふ仁慈の大御心に感泣しつゝ、全世界一體の平和を達成せんとする理想實現の爲の聖戦であつて、歴史に輝く神國日本が人類平和に貢獻する一大維新である。

今や世界の歴史は日本を中軸として展開し始めた、日本の一舉一動は現在世界の動向を指導しつゝある、この情勢は日本國民が等しく感激の中に感得しつゝある事實である、この日本が今や天地神明の命令を受けて敢然起つたのである、この聖戦の特色こそは大和民族のみが獨占する名譽であつて、其責任は重且つ大である、もしこの責任を果し得なかつたならば天地神明の命令に反き奉ることになるのである、一天萬乘の大御心に添ひ奉ることが出來ないことになるのだ。おゝそうだ！、我等は大使命に

向つて突撃する！、邁進する！、戦に負けて正義の活動はあり得ない。戦は常識の圏外である、素より犠牲も覚悟の前だ、あゝ：犠牲は聖戦の花であり：この花の咲くところ勝利の戦果が實るのである、花無きところに實は結び得ない、我等が世界の強國と誇り得るのも、世界が日本を中軸として展開し始めたのも、日清日露の兩役其他の戦ひに、我等の同胞先輩が犠牲の花と散つた戦果の賜物である、我等はこの榮譽と歴史とをより良く子孫に傳へなければならぬ責任者であり、上御一人の大御心に添ひ奉り犠牲となつた先輩に答へなければならぬ現代當面の義務を負ふてゐるのである、日本の國民たる者は第一線の將士は勿論、銃後の如何なる人々も、各々其本分と使命との爲に起つて戦はねばならぬ、戦は自己の本分だ、家の爲だ、國の爲だ、世界全人類の爲だ、あゝ同胞よ！ 立つて戦かおうでは無いか！ 光輝ある君國の使命の爲に。

(四) 事變の終局に處するの途

現在の戦況を瞥見すると、北支戦線は察哈爾—綏遠—河北—山西—山東の各省、面

積としては我國の約二倍の地域を我軍に占領され、中支の戦線は長江に沿ふて漢口以南の地域を征服されたばかりでなく、我北上軍は南下軍と協力して隴海線の一帯を挾撃し、我等の掌中に收めることは最早日時の問題となつた（本文が世に出る頃は必ず占領—その上廣東を初め、支那全土の要地は悉く我爆彈の威力に制壓され、戦々競々色血を失つてゐるのである、この情勢からすれば支那の敗戦は確定してゐるのであるが、今て、從來の戦争ならば休戦喇叭が鳴り響いて外交談判と云ふ筋に入るのであるが、今迄の日支事變にはソ聯と英國の影が形の如く支那に働き掛けてゐる、さ無きだに他力本願の支那人心理がこの存在に依在し、何時かは他力を利用して日本に一矢を報いることが出来るであらうことを希望付け、今や世界の大事勢が、英ソをして支那に秋風颯々たる状態に至らしめたにも關らず、支那は迷夢を辿りつゝ、其希望を棄てないと云ふ厄介千萬な事情があり、容易に外交軌道に乗るべくもない、日本としても今となつて外交談判に入る様なことは絶対避けねばならぬ立場にある。

即ち我等日本の國家は、從來支那の主權執行者と做した「蔣政權を對手にせず」と

否定したのであつて、この否定した政權を相手に談判する様なことがあれば其政權を認めることゝなるのであつて、それは全く不可能なことである。従つて我等と主義思想を一にする新政權が生れて来るまでは談判の相手が無い理であるが、無いからと云つて何時迄も無爲に待つてゐる理にも行かない、だから新政權が完全に發育したならば何時でも談判の出來得る様に準備を整へつゝ我國独自の行動を進めて行かなければならないのである。

独自の行動と云ふのは、所謂東洋平和建設の爲に必要な手段を有効適切に實行することであつて、

其一は、我等と主義主張を同ふする新政權の誕生し得る様、良民に對して加はることあるべき總ての危険を排除してやると同時に、誕生したる新政權が急速完全に發達し得る様諸般の援助を與へることである。

其二は、平和を攪亂する敵の兵力其他有害なる總てに對し、我方の實力を以て之を排撃し、其後に來るべき總ての不安を防衛しつゝ、絶對的治安の維持を確保し、その平

和なる地域に於て良民大衆が各々生業に安じ、我等の指導と彼等が體驗に依つて東洋平和確立の使命を自覺し、眞に日支の提携を謳歌するに至らしめ、彼等が日本に對して持つ感激と信頼に對しては、如何なる惡魔が攻撃し來つても日支の結束は絶對に破れる憂ひ無し、と云ふ理想の實現を建設することを指すのである、この理想實現の曉には支那四億の民衆が雪崩をうつて合流し來るであらう、斯うなつたら如何に利己的な第三國が吠えても、この人類幸福の事實の前には耳を傾ける輩が無くなるのであつて、茲に東洋平和建設の礎は築かれるのである、この理想に到達するには一年や二年の短日月で出來得るものではない、最少限度五ヶ年の日子を要するであらう。

最少限度五ヶ年と云つても五ヶ年の間砲煙彈雨の下に馳驅せよといふのではない、今日以後に於て支那の國民黨を相手に競合はあつても、天下分目の肉彈戰が行はれる様なことはあるまい、しかし嚴然たる守備力は絶對に持つてゐなければならぬ、守備力の減退は敵の擡頭を誘發する原因となるからである、であるから、我等の建設工作が終つて安心の出來るまでは、斷じて守備兵力を減退することが出來ないのである、

従つて出兵期間の長期に亘ることは免れ得ぬ事實であつて、戦争が永續すると云ふ見方にもなるのであるが、この守備兵力こそは平和の水を湛へる堤であり、之が爲の駐屯部隊に参加する將士は尊き使命の實行者として永遠不滅の榮譽を負ふものである。

(五) 敵を封じらる余の私見

「敗軍の將兵を談せず」とは支那の名言である、然るに蔣介石敗將は敗陣の擴大するに伴つて益々兵を談じ、長期抗日と悲しく聞える豪語とを連發するのである、我等は蔣が豪語すると否とに關らず長期膺懲と積極的工作に出なければならぬ立場を餘儀なくされてゐることを自覺しなければならぬ。

軍當局は何を考へてゐるか？、それは吾人門外漢の窮知することの出来ぬ範圍であるが、余は斯く考へてゐる。

一、北部戦線は南下北上の兩軍を隴海線に集結せしめたる勢を以て、潼關より西安に至らしめ迪化—哈密—安西—蘭州を通じて來るソ聯が致す支那援助の禍道を斷つ

爲、蘭州を握らなければならぬ。

二、長江筋は武漢の地を定め、進んで重慶の咽喉を扼して四川を締め、半身不隨の不具者として抵抗を不能ならしめる。

三、南支は廣東の活動を停止せしめる爲に、廣九と粵漢の兩線を斷ち、海港香港の魔手を封じなければならぬ。

(六) 終局は我等の努力如何に依つて決す

以上の行動完成に依つて聯ソ容共の輩も、拜白依存の他力本願者も、財力武力の兩面から完全に敵對行動を封じられると同時に、自己の利益の爲には人道も平和も無かつた第三國も、日本の正義と實力とに抗し得ず、事實の前に降伏して我支配下に指導されねばならぬことゝ成り、この情勢下にある支那人は日本の實物教育を受け、其民族性の發動に依つて、自ら向ふべき目標「日本に信賴することが我等の生きる道である」を發見するのであつて、茲に我等が希望する平和の曙光が輝き出るのである。

若し夫れこの事業を達成することが出来なかつたならば、日支は相互に苦難を繰返し、東洋は永遠に闇の世界と化すであらう、東洋の盟主として責任を果さねばならぬ日本は、今や試練の臺の上に立ち上つたのだ、ウンと力を入れて、ドーンと突き當つて、根氣強く邁進しなければならぬ。日支事變が何時終るか他人に問ふ必要は無いのである、問はれても他人には判らないのだ、終るか終らぬかを決する鍵は日本人が握つてゐるのである、即ち日支事變の解決は日本人の努力如何に依つて決せられるものであることを自覺しなければならぬ。

防空に就て國家及國民に促す

(一) 不燃焼の支那建築物

筆者は昨年八月以來、間斷無く各戰線に従軍して親しく體驗を積んだ、そして其體驗から我國の防空に就て是非共國民同胞に促さなければならぬと痛切に感じた事がある。

それは上海方面に於て、我空軍が投下した爆彈炸裂の状況から見た我國の防空に就てである、黒煙蒙蒙として天に沖し、物體の破片は物凄く飛散する、そして、四邊を震動する空氣の波動は電波の如く閃くのだ、その一瞬華麗を極めた殿堂も、鱗次櫛比する大廈高樓も、其姿を消して黒こげ凄慘な情景と化するのであるが、支那の家屋は大概煉瓦か、セメントか、石造か、土造か、或は鐵板が用ゐられてゐるのであつて、大體不燃焼物建築である、従つて強い耐火力を持つてゐるから容易に火災を免れる事が出来るのである、ニュース寫眞の火災は家の内にある物が燃えてゐるのであつて、家屋が燃えてゐるのでは無いと解して宜しいのである。

(二) 大震災の教訓を偲ぶ

この事實を見乍ら余は常に想を内地に走らせたのである、我國の家屋は大部分が木造であつて、焚物を積み重ねた様な状態である、若し敵機が襲來して、風上から焼夷

彈や爆彈を投下したとしたならば如何なるであらう、忽ち起る火焰は風下へ風下へと紅い魔舌を伸べるであらう、この急に處して我國都會の市民は、この火を防ぐことが出来るであらうか？、又整然たる秩序を維持して避難し得るであらうか？、余はこの點に就て深く憂ふる一人である。この問題を解決する參考として、余は過る關東の大震災を想ひ起すのである、あの時の死傷は市民が非常時に處する心の修鍊と動作の訓練の不足から、周章狼狽其爲すところを知らなかつた結果に因るものが甚だ多かつたと記憶してゐる、更に火災に至つては、逃げることを急いで火元の始末をしなかつた點に重大なる原因があつたことを想起するのである。殊に遺憾に思つたことは「鮮人が暴動を起す」とのデマに躍らされ、日本刀を引き抜いて騒ぎ廻つた事であつた、内地人が朝鮮に居つて其處に暴動が起つたと云ふならば兎も角も、日本人たる者が一しかも帝都の真中に於て、假りに三百や五百の反日鮮人（假裝に付き誤解なき様）が暴動を起したからと云つて何も騒ぐ必要は無いでは無いか、然るに卒然としてあの舉に出たことは、震災といふ大きな衝動を受けた市民が心の中心を失つた結果に因る

ものであつて、こゝに當時の國民訓練の不足が見出されるのである。

又先年北海道の函館が大火災に見舞はれた時、何故あの多くの死傷者を出したのであるか？、これを検討することは如實の教訓を受けることであり、又非常急變に對處する指導資料ともなるのである、あの日の海は颱風に吹き捲くられて怒濤が岸壁を碎かんばかり叩きつけてゐた、時しも火の手を避けて右往左往する人は、誰が叫んだか岸壁へ岸壁へと雪崩込んで行つたのである、押寄せた人々の力は先着の人々を容赦無く岸壁から怒濤の中へ押し落した、警察を始め如何なる人の制止も指導も何の役にもたゝなかつた、この訓練無き無統制が多くの人命を犠牲に供した事實を顧みて今後に善處しなければならぬと思ふ。

(三) 防空演習を事實化せ

余は現在日本各地に行はれてゐる防空訓練及び施設に就て、百尺竿頭なほ幾十歩も進めなければならぬ必要を痛感するものである。

其第一は、避難所の設置である、避難を目して卑怯と見るのは誤りである、戦争は最少限度の人命損失に於て最大の戦果を収めることを以て最善とする、この避難所は先づ老幼婦女子病人等を收容し、其餘は隨時所要に應じ萬遺憾無き様利用しなければならぬ。

其二は、火災其他に對する避難の訓練である、これも決して卑怯を意味するものではない、この訓練が行届いてゐないと、まさかの時に右往左往思ひ、人と人が押合ひ、へし合ひ、人の塊りは移動すべくもなく、其爲火焰に包まれ或は爆彈の目標となり、意味なき大死の犠牲とならなければならぬ、であるから「何町の人々は何々の道を経て何處に到る可し、若し事故に依り不通となりたる場合は、何々方面より何處に到れ」といつた様に組織統制ある避難訓練をすることが最も必要であり且急務であると思ふ。

こゝに特に注意を要することは「義勇奉公進むを知つて退くを知らざる日本人にして今日の榮譽あり」と云ふ意義と履き違へてはならぬ、退却と避難とは自らその意味を異にするものであり、行ふ場合もそれ／＼異なるのであるから、これを混同することの無い様意識的に理解しなければならぬことである。

其三は、防空演習をもつと、實質的に行ふ必要が有ると云ふことである、現在の演習状況を見てみると、國民の共同動作訓練の上には非常な効果を収めてゐると思ふのであるが、翻つてラヂオ放送等を聞いてみると「敵機現はれ爆彈を投下致しました我方の防空陣は健在であります、消しました消しました」まるで遊技の様な感じがするのである、頭から「敵機は一機たりとも我領土内に入れぬ」といふ自信的建前からするならば敢て何をかいはんやであるが、戦は最悪の場合を豫想して掛らねばならない我等が見たあの爆彈の威力に、発電所や水源地其他の心臓部を護る人々が、バケツに水を汲んで走り廻つて眞の防禦が出来るのであらうか？當局は！國民は！眞剣に本格的に、戦場の覺悟で鍊へておかねばならぬことを痛感するものである。

(四) 支那現地の防空陣を見る

余は南北戦線に於ける支那の防空設備を見て、蔣介石が北伐に成功して南京に首都を定めて以来、僅々幾年を出でざる間に於て、邊疆に及ばぬ所ありとはいふものゝ、四百餘州に號令して斯くも戦備を整へ、斯くも防空に對する指導に成功してゐたかを見て一驚を吃したのである、南北とも其建造内容は大同小異であるが、高地の横腹に穴を穿ち、之に身を寄せてゐるのが最も多く見受けられた、余が見た範圍の代表的なものは何んといつても太原である、近代支那唯一人と稱せられた名牧民官閻錫山が、山西モンロー主義の下に、支那動亂の慘禍に超然し、民業各々其志を得た歴史を持つ山西省、一時は武力の戦争にも巻き込まれ、近くは共產黨の侵略に委せたりとはいふものゝ、閻錫山は矢張り支那山西省の閻錫山であつた、幅四十餘米突高さ三十呎にも及ぶ太原の城壁を利用して、其地下更に三十呎も掘下げた軍事倉庫、これに貯藏されたガソリン・銃器・彈藥等その規模の大なること及び防禦力の強大なること、我空軍の威力を外に悠々たるものがある、そして戸毎の門口には省政府から發せられた防空心得なるものが張り付けられてゐた、それに依ると「日本の空襲に對しては決して外に

出てはならぬ、我等の家屋は不燃焼物であるから、壁の傍に机の如き物件を置いて其下に身體を置けば、例令隣家が爆破されても安全である、努めて火災に注意せよ」等々民衆は一糸亂れず之を恪遵したのである、であるから空襲を行つた際猫の兒一疋見當らぬ静けさ「實に敵乍ら見上げたものだ」と我荒鷺に舌を卷かせたのである。

(五) 悠々たり支那の民族性エピソード

この支那人心理に付て參考の爲一ツの事實を話してみやう、昨年事變勃發當時、兵馬騒然たる天津日本租界平野洋行の門口に一人の車夫が車の蹶込みに尻を下して腕を組み、ジツト考へ込んでゐる様な表情をしてゐた、余が「何をしてゐるか?」と問ふても答へる様子が無い「入口の邪魔だから立退け」といつたら「暫く待つてくれ」と云ふ「如何した」と追及すると、彼は「尻を撃たれて血が出るから、體の重りで押さへてゐる、立てば血が出るから暫くたのむ」と云ふのである、そこで「馬鹿ッ繃帯してやるから立て」といつて、手入の上繃帯をしてやつた、すると彼は「謝々……有難う」

と云つて、ノソリノソリと歩いて行つた。

今一つは九月下旬我等が滄州を攻撃してゐた時のことである、興濟鎮から姚官屯に向ふ途中、大雨の後を受けた運河は泥水を押捲つて流れる、其淀に二本の竿に糸を垂れ、河の流れに目を放さず見詰めてゐる四十前後の太公望がゐた、彼我兩軍の砲聲は殷々と轟いて来る、余は彼に向つて「恐ろしくは無いか？」と呼びかけた、すると彼は「戦ひは兵士のすることであつて俺には何の關係も無い」と、全然餘所事の様に、黙々として釣を樂しんでゐた。

この二つの實話は、日本人から見れば度胸が良いとか、強がるとか、批評するのであるが、決して左様なものでは無く、これが漢民族の性格なのであつて、別に故意が伴つてゐるわけではないのである。日本人は支那人を見るとボンヤリだとか、ノソボだとか、鈍感だとか批評するのであるが、この民族性が「我等は天下の漢人なり」と自負して、悠々幾千年の歴史を綴り、君臨する征服者を悉く同化し去つた彼等が民族の偉大性を物語つてゐるのである。

(六) 修練が足らぬぞ日本人

日本人は未だ見ぬ世界に就て之を想像し、所謂取越し苦勞をする癖がある、その反面に未知の世界を知つて終へば忽ち之を我物にする長所を持つてゐる、例へば旅行するにしても、自己の智能の範圍内に於てあれやこれやと想像を逞ふし、或種の不安をさへ感じてゐる、それで居ながら、知悉した後では「百聞一見に不如」と他人に語つて得意になつてゐる、戦場に於てもその通り、一度弾丸の下を潜る迄は或種の恐怖に襲はれてゐるのであるが、一度砲聲や弾丸の唸り聲を聞いた體驗を持つと、全く別人の様に沈著な態度に變つて来る、それと同様に、日本人が何か大事件に遭遇すると、最初は必ず血相變いて「アガル」傾向がある、そればかりで無く物事を大袈裟に取扱ふ傾向も見遁せない短所であることは否めない事實である。

この日本人の心理状態が空襲を受けた場合に恐ろしい勢で活動するであらうことに注意しなければならぬ、余は青島に於て獨逸人と語り合つた時「日本人と獨逸人と

はどちらが偉いと思ふか？」を質して見た、すると獨逸人は卽座に「それは獨逸人だ」と答へたのである、で我輩は「何故獨逸人が偉いか？」と更に質して見ると、彼の答は「日本人は慘憺たる戦敗の試練に遭遇したことが無い、と同時に其慘苦を克復した経験をも持つてゐないのであるが、我等は堂々と戦ひ堂々と戦敗の慘禍を克復した、だから獨逸人が偉いと思ふ」といふのであつた、寔に傾聴すべき一言である余は感心したのである。

その通り、勿論希望すべきことでは無いが、日本人は未だ戦敗の苦い経験と空襲の危険に曝された事實を持つてゐない、従つて之に對する未知の世界を残してゐる、今の日本人はこの未知の世界に對する想像を想ひ／＼にやつてゐる時代なのである、日本人はこの未知の世界に遭遇する場合決して周章てはならない、狼狽してはならない、一日も早く對應動作の訓練と心境の修練とを完結し、無用の犠牲を出すことなく、堂々大國民の本領を發揮し、防空の目的を達する様、舉國之が準備の完成に邁進し、防空の勝利者たらんことを促す次第である。

戦争に常識の圏外なり

「戦争は常識の圏外なり」と云ふ格言がある、常識の範圍で済む事ならば双方の談判で物事は解決する筈であるが、談判では到底解決の途が無くなつた場合、人間が最悪とする身命を犠牲にしてまでも解決すべく武力に訴へる、それが戦争と云ふのである。然らば常識とは何ぞ？、これに對する回答は各々其立場と見解とに依て違ふのであるが、一ト口に云ふならば「何人が見ても最もだ」と思はれる有様を常識と云つて誤りはあるまい、この見地から觀ると皇軍將士が今日迄戦つた事績は、悉く常識の範圍では判断の出来ない程度の行動である、だから此の戦争は無理だとか—あの戦争は無理だとか、批評するとしたならば、それこそ無理な話だといふことになる、砲煙彈雨の其中へ眞正面から突撃して行くのであるから、その事既に最初から無理なのである、しかしこの無理な行動は正義を斷行せんとする君國の意思に依つて發動するものであつて、斷じて自己の利害を目的とする意思の發動では無いのである、従つて一應

無理であるかの如くに見える動作は、正義斷行の表現であつて、人類幸福の水準Ⅱ即ち常識に對する破壊行動では無く、人類が渴望してやまぬ幸福Ⅱ即ち平和建設の爲の神聖なる作業に外ならぬのである。

これをもしても徒に批判せんとするが如きは絶対に許されないのである、何となれば……現今は戦争の眞最中であるからだ、戦争の未開に先立つて平和の爲にするものならば、討論も批判も必要な一要件であらう、亦戦争終了後に於て將來の平和の爲に過去を論じ或は批判を試みることも必要な事柄であらう、戦闘酣なる今日に於てかれこれと批判を試みる事は、一方に於ては國論を誤る虞があり、他方に於ては相手方及第三者に對して國論の歸趨を疑はしめ、それが爲に思はざるの不利を誘發する虞れがあるのであるから、各々相戒めて以て敵に乗ぜられぬ様警戒を要するのである。

更にまた、戦地に於て辛苦慘憺せられる將士、及び日に日に倒れて行く犠牲者に對しては何と申してよいか……全く言葉に窮するのであるが、これとても忍ばなければならぬのである、何故批判が許されないのであるか？、何故犠牲を忍ばなければならぬのであるか？、それは戦に勝たねばならないからである、戦争は勝たねばならない！、如何なる事が有らうとも戦ひは勝たねばならないのだ、重ねて言ふ戦に敗

ては正義の實行者と成り成らないのだ、將士の苦勞も死傷者の犠牲も、多くの人類に幸福と平和とを惠むが爲の礎石である、過去の人類は繰り返し繰り返し忍苦と犠牲の力に依て救はれて來たのである、將來の人類もまた尊き忍苦と奉公の犠牲に救はれて、平和と幸福とを惠れつゝ永遠に歴史を綴つて行くのである、今戦線に在る將士は君國の爲に奉公の實を致すと同時に、人類史上最重にして最大なる任務を果しつゝあるのである、銃後の國民はこの尊き任務に奉公する將士に對し、滿腔の誠意を以て感謝の意を表するとともに、朝夕武運の長久を祈り續けてゐる。

偉大なり我等の制海權

回顧する、今を去ること三十四年前征露の役に於て、我等の運送船常陸丸や佐渡丸が北九州の沖合玄海灘に於て、露艦の爲に無念の涙を呑んだ深い恨のみ印象は今尙吾

人の頭に去來するのであるが、當今に於ける我國の海軍力は如何だ、東部太平洋、日本海、オーツク海、東支那海等々、東亞の海面及び其近海一帯は完全に我制海權下に支配されてゐるではないか、然り滿洲事變以來支那事變の今日に至るまで、日本と東亞大陸との交通は波無き湖水の如く無敵自由の平和を保ち、海運に一點の支障も起さないのである。

ソ聯の極東軍司令官ブリユヘルは、浦鹽斯徳の港内深く六十二艘の潜航艇に自稱第二のエムデンを浮べ、事有らば日本海を荒し廻つて「日本と大陸との交通を遮斷するのは朝飯前の茶番事だ」と豪語してゐるのであるが、我等は彼の毒牙に委せることを欲しない、彼に六十二艘の備が有れば我には優秀を誇る〇〇〇が有る、彼もし我に敵せんとするならば、先手を打つて堂々とこちらから乗り込んで戦ふまでの事だ。

英國は、日本が支那に成功したならば必ず印度の獨立を支援するであらう？等と、日本の正義を途方も無く勝手に曲解して、シンガポールや香港等に於ける極東艦隊の活動整備に大童になつてゐる、英國よ！、日本を曲解する前に「印度は英國の牛乳な

り」と、誰がこの言葉を發したかそれを考へて見るがよからう、そして其後に來るものは何か？、自ら考へて見たら日本に對する曲解は氷解する筈である。

米國にしても、布哇のパール軍港を擴張したり、アリユーションのダッチハーバーを根據に大演習をして見たり、ガム島の強化に腐心したりする必要は有るまい、米國と我國とは貿易上の相互顧客であつて、戦はねばならぬ何ものも持ち合せてゐないのである。

こんな事を考へ乍ら、支那へ軍事輸送する我等の運送船が、何の心配も無く航海する姿を見ると國力の偉大さに感激し、萬歳の聲が自然に咽喉を衝いて飛出して來る。

余は全日本の同胞に對して、滿洲事變直後に發表された獨・英米・の代表的新聞である「ターゲス・ツァイツング」「ヘラルド・トリビュン」「デーリー・テレグラフ」等の社説の大意を話して見たいと今想出したのである、曰く「日本が今回滿洲に於てあの大事業を遂行し得たのは、單り陸軍のみの力に依るものでは無く、如何なる大事件が起らうとも微動だにせず、嚴然として太平洋を睨み續けたあの大海軍が有つたればこそで

ある、然るに何故か？、日本の國民は海國民でありながら、この事實を把握してゐないかの如くに観えるのは一大奇觀である」云々と云ふ意味のものであつた、この意味は海國日本の國民に對する一大警鐘であり教訓であると思つてゐたのである。

果せる哉！今次の事變に於て、支那沿岸の要所々々にドツシリと腰を据え、蒙々たる黒煙を吐きながら重き任務に就てゐる朦朧の英姿を見る時、その頼もしさに胸の高鳴りを禁じ得なかつたのである。そして第一次上海事變の時、海陸共同策戦に未曾有の戦史を染めた記録が想ひ出されるのであつた、その上今度の事變には海の荒鷲と陸戦隊と陸軍と、全體が一身同體と成つて海陸共同の見事な策戦に凱歌を上げた事實を見たのだ、余は神國日本に生れた感激に満たされて「乃公も行くぞ」と一人言、幾度か幾度か繰り返したのである、我等は君國に生れ—君國の爲に生き—君國の爲に死する—のが運命付けられた義務であり本望であることを、しみ／＼と感知した、そしてそれが一再ならず繰り返されたのである。

最後の勝利は武器か肉弾か？

「大輪に廻れ—大輪に廻れ」時は一月下旬の入り、北支南部戦線某驛に到着の軍用列車から放り出された余は一寸先闇の眞夜中、三キロばかり離れた〇〇隊部のゐる未知の道路を西に向つて歩き出した、闇の中には大入道が立ち塞つた様な城門が眼に感じられる、そこを通り抜けて行く手にドサクサク／＼と人馬のドヨメキが闇を傳つて耳に入る、敵か？……皇軍か？、耳を澄せて感受する聲は正しく味方の特科隊である、余も亦大輪に廻つてチョイと列に入るなり知らぬ顔をして歩き出した、それでも見えない眞の闇夜だ、乃公のリユックサクに當つたのは確かに後の馬の鼻らしい、馬が止つたので氣が付いた兵は「ニードケろ」おや支那人と間違へてゐるワイ、スット列外に出た乃公は目的地に辿り着いた、翌朝になつて〇〇部隊の大行李である事が判つた。

おゝ余が最初従軍した頃馬に手古摺つてゐた特務兵の人達が最早やスツカリ馴れ切

つて居る、あの人達の中には近い將來に於て縣知事と成る經濟部長も居た、學務部長も居た、醫學博士も居た、大會社の重役も居た、警察署長さんが元部下の巡查であつた豫備少尉の指揮に従つてゐる事實もあつたのだ、地位も身分もかなぐり捨て君國の爲に團結したあの人達の尊い心境が胸に焼付いて來る。

日本人なればこそ……あゝ良くやつてくれる、自然に頭が下つて來る、感謝せずにはゐられない。

余は特務兵諸君が如何に馬に苦勞するかを特に注意して研究した一人である、余は國家に――當局に提唱する「日本人の男子たる者――否女性も、丁年に達したならば原則として不具者以外は悉く入營せしむべし」と云ふのである、期間は専門當局の定めるところであるが、假令二ヶ月か三ヶ月でも入營させ、其間に於て軍事と兵器の總括的觀念を注入することと、馬の取扱を練習せしめることである。文明の利器が如何に發達しても、現今人類が持つ程度の文明の力では、到底大自然に勝つことは出來ないと思ふ、手近な例を擧げるならば、交通の寵兒を以て自任する自動車も、無敵を誇るタ

ンクも、上海戰のクリークや豪雨の爲に泥海化された北支の曠野にはその威力を發揮する事が出來なかつたのである。或はまた勇猛果敢壯烈にして華かなる空爆も、一步と地上部隊が占めて行かなければ戦果は定らないのである、結局するところ「最後の勝利は肉弾である」この肉弾を成功させたのは特務兵である、馬である、斯ふした見地から兵科の如何を問ふのではない、全日本の國民が馬を扱ふ能力を持たなければならぬことを將來戰の爲に痛感し、而して之を提唱するものである。その一助として青年學校の一科に馬術を加へること等も一方法であらう。

露營の一夜

支那兵が破壊した壁の穴から白銀色に冴えた月の光りが物凄く差し込んで來る、板張りの上にアンペラ一枚の支那家屋、家屋といつても名ばかりだ、窓から穴から寒い夜風が遠慮無しに吹き捲る、晝の軍務に疲れきつた戦友達は思ひ思ひに武裝のまゝ、蠶虫の様に折り重なつて露營の夢を結ぶのだ。

其眞夜中である「コッーン」誰か乃公の頭を殴つた者が有る、夢破られた乃公は「誰だッ」と叫んでモクツと起き上つた、見れば誰でも無かつたのだ、前後を忘れて眠り込んだ戦友が、寝返りを打つたトタンにその靴が乃公の頭に當つたのだ、戦友の足に何の悪意があらう……、戦友の靴に何の罪があらう……。

月の明りで眼に浮ぶ戦友の寝姿、鐵兜―背囊―銃劍―水筒等々、まるで子供の玩具箱をぶちまけた様だ、おゝ！想へば乃公には今年二ツの子供が有る、今頃は安らかに眠つて居るであらうか？母の懷に、老たる父母は眠れぬまゝに乃公の身の上に想を馳せて寝物語りをしてゐるではなからうか？、父母よ……妻子よ……ど心の中に叫んで見た、そして早く歸りたい、歸つて平和な家庭の人に成りたい、と……想ひ續けた、其時「隊長殿ッ！」と叫んだ者がある、それは戦友の寢言であつた、おゝ―戦友か―戦友は夢にも御奉公を忘れないのだ、それなのに……乃公は今家の事を考へてゐた、卑怯者ッ……不忠者ッ、だが待てよ、乃公は今乃公を叱つたのだが、一體戦地に居て家を想ふてはならないのだらうか？、家を忘れる事は國を忘れる事なのだ、家を想ふ

ことは國を想ふことなのだ、想へ思へ家を國を、それが我等日本人の全精神なのだ。

しかし、だがしかし、家や國を想ふといふことゝ、歸りたいといふことは自ら別個の問題なのだ、家や國を想ひ思ふならば歸つてはならないのだ、最後まで踏み留まつて御奉公をすることこそ、それが家を想ひ國を思ふ日本人の行くべき道なのだ、俺達は今全世界の人々の前に立つて「俺は日本人だ」と誇つてゐた、「お前は支那人と一樣だ」と人から言はれたら「何をッ」と逆襲する権利を行使してゐたのだ、この大なる自信と名譽とは誰が與へて呉れたのだ、我等は君國一體、忠孝一本の國に生れ、天壤無窮の皇運に抱かれてゐる、幾千萬年不朽の歴史は祖先の民族力と傳統的正義感に依つて築き上げられたのだ、その礎石の上に立つて更に築かれた 明治大帝不磨の御偉業之を翼賛し奉つた日清日露の兩役に、或は歐洲の大戦に、海に陸に流したあの血潮、鐵血山を覆ふて山形改まり、熱血の迸るところ海洋紅なり、壯烈鬼神を泣かした祖國祖先の事業が、今俺達の誇りとする光榮を築いてくれたのである、我等はこの光輝燦たる歴史をより良く子孫に傳へなければならぬ義務と責任とを負ふてゐるのだ、そ

うだ……俺はその人柱となるのだ、崇高にして森嚴なる平和民族の大事業に俺は參加してゐるのだ、大義の前に小我を捨てるのが日本人の本分なのだ、明治維新の志士橋本左内先生は「妻は病牀に伏し子は餓に泣けども」敢然として大義の爲に起つた、我等は全世界を正義日本の支配下に於て幸福世界を作らなければならぬ、俺達といふ犠牲があつてこそ、國家に東洋に世界に純正平和が訪れるのだ、國家無くして家庭の平和は有り得ないのだ、眼前の平和を求めることは奴隸志願の悪夢であることを悟らねばならない。

誰かと夢でクス／＼と笑つてゐる、笑ふな、大義の爲に俺は起つのだ！否起つてゐるのだ！上御一人に捧げ奉つた我身である、天に代りて不義を討ち……と送つてくれた銃後の國民の聲は間斷なく耳に聞えて來る、戦争が無かつたら……と物想ふことは人情の常であつて諒とすべきものではあるが、小我の爲に捕はれてはならない、一度は死ぬる人の身は、大自然の支配力の中に、造化の神の手に依つて運命付けられてゐるのである、祖國及人類の爲に戦場の華と散るのも運命の神の指揮であり命令であ

るとしたならば、日本男子の本懐之に過るものはあるまい。自ら問ふて自ら答へる露營の夜は更けて行く、戦友の鼾の音が高鳴る、犬の遠吠に耳を敬て、鶏鳴を待つ。

支那民衆の心

本項は余が従軍中所々に拾つた談片である、従つて條理一貫した成文では無い、然し現地諸種の角度から見て綜合的參考となるべきものを採擇したものである。

(一) 現在シイエン、ツァイ、マイ、ネー、フア、ツ沒有法子シイエン、ツァイ、マイ、ネー、フア、ツ 〓今は仕方が無い

余は上海に於て舊友徐百川君に邂逅した、そして四方山の話の最後に「君は支那の將來をどう思つてゐるか？」と質した、すると彼は「現在沒有法子 可是一到機會 必定有法子—今は仕方が無いけれども、一度時が到れば、必ず仕方が有るのだ」と云ふのであつた。彼の一言は意味深長である、即ち「今は日本の實力の前に如何ともする事が出来ないけれども一度時が到れば必ず我等の希望を達することが出来る」と云

ふのである。彼等は矢次ぎ早に活動する日本に對しては如何ともする事が出来ない、けれども永い年月の間には必ず日本人を同化し、日本の經濟を利用して我等の經濟に勝利有らしめると考へてゐるのである。この考へ方は徐君一人の考へでは無く、少くとも國民黨員全體を代表した言葉であらう。

これと同じ様な考へ方で「日本人は北支を占領した」と云つてゐるけれども、あれは日本人が北支へ澤山入つて來たまでの事で、何も北支を日本に分割した譯では無い」等といつてゐる、如何にも支那人らしい見方であるが、支那人心理を知る參考の一ツである。

(二) 支那兵よりは日本兵の方が善い

膠濟線の或田舎で周子陽といふ村長がゐた、之に對して「日本兵と支那兵とは何れが良いか？」と尋ねて見た、すると彼は日本兵が良いと答へたので「それは御世辭だらう？」と追及すると、其答が振つてゐる「日本の兵隊には悪いのも居る、しかしそ

れは何處の國にも有る事だ、日本兵には良い兵が多いのに反して支那兵は皆悪い、だから日本兵が良い」と云ふのであつた、彼等が兵の良否を定めるのに、何を標準としたのであるか、面白い研究問題である。

其部落で正午になつた、飯盒の飯は凍つて石の様だ、そこで焚物があるかと尋ねたら居合せた支那人がバラ／＼と駈け出して行つた、暫くすると何れも一抱づゝの高梁殻を持つて來てくれた、燃える高梁殻の中へ水筒を投込んで、沸いた水筒の湯で解かした飯を咽喉へ投げ込んだ、村の顔役らしい男に「御親切有難う」と云つたら「それには及びません、實は支那兵等に委せて置くと燃料を勝手に焚いて終はれるから、つまらぬ損をしない様に村中が持出す事に定めてゐるのです」と、成る程勝手に焚かれちやたまらないわけだ、これも支那人心理の一断面である。

(三) 看板の塗替と保身術

南も北も同じだが、各地を歩いて見ると、城壁や院子（支那人は官衙でも個人の家

でも、必ず煉瓦や土塀で一地域を圍み、其の中を院子と稱してゐる。この圍壁が外敵に對する防禦線であり、其中庭（即ち院子が自己の平和境である）の壁に、點々と無雜作に塗り潰した跡がある。それは何であらう？、それは昨日まで熱烈火を吹く様な排日文が書かれてゐたのである。そこへ日本軍が行つたものだから周章て塗り潰し、知らぬ顔の半兵衛を定めているところ腹立たしくもあれば可笑しくもある。昨日にははる今日の環境、日本人ならば感慨無量といふところだが、彼等には馴れた世相の變化に過ぎないのだ。

これとは對象的な話だが、北支の某驛で一ト荷擔きの屋臺店、其平臺の上を見ると美しい日の丸商標の付いた便箋が飾られて居た、掘り出し物だ買つてやらうと手に取て見たら便箋の表紙だけなのだ、その譯はこうだ「貧乏で日本軍を觀迎する旗が無いから、せめてこれで」と云ふのである。機轉か偽裝か保身の術か真心か何れにしても蟹が甲に似せての處置辦法、生活戦線の支那人を見る好個の標本である。

(四) 前進主義の支那人

「王侯將相寧ぞ種あらんや」の支那幾千年の歴史は、天下取りの競争であり興亡史である。天子王者と稱する者が王道を以て君臨すると霸道を以て支配するに關らず、武力鬭争の客體となつて苦しみ抜いたのが支那の民衆である。しかも近時の支那は、軍閥者流が自我慾伸張の爲の内亂と動亂の巷に揉み抜かれたのである。次から次ぎと襲つて來る艱難に追廻された支那の民衆は、其荒された被害に對して要求することの不可能を知つてゐる。素より彼等個有の民族性も働いてゐるのであるが、彼等は過去の事柄に對して執着せず、駄目だと見通しが付けば綺麗サツパリと諦めて、これから先を如何にすれば宜いか、即ち新たななる建設に向つて働き掛けるのである。彼等は過去に於て幾度か幾度か戦の爲に荒された試練を持てゐる。だから今度の戦禍の後に於ても荒されたそれはそれとして、如何なる困難にも驚きの色を見せず、堂々として更生復興の前進へ一步一步と歩いてゐる。眞に敬服すべく又偉大なる民族性である。何

が彼等をして斯くせしめたか？、彼等は國家の權力といふものを持合せていない、従つて彼等を平等に支配する權力も無ければ保護してくれる力も無いのであつて、彼等は彼等自體の力を以て生きて行かねばならぬ立場にある、そこに彼等の獨立獨歩があり、生存の爲の努力があるのである。

これと對象して日本人を考へて見る、日本人は過去の事を餘り考へ過ぎる傾きがありはしないか、例へば火災の場合等、どんなに考へても取り返しのかね事柄に對して「あゝもすれば宜かつた、斯もすれば宜かつた」と一ト盛り其話で持ちきるのである。それは全然無理でもあるまいけれども捕れすぎる嫌があるではあるまいか、過去を論ぜず希望の前途に邁進せよ！余は支那人を禮讚するものではないけれども、戦場被害に曝された支那人の行動を見て今更乍ら寔に貴重な參考を提供されたのである。

(五) 感心な治安維持會

前章と同じ原因から生れたものと解するのであるが、戦禍の煙り未だ消えやらぬ町

に村に、治安維持會なるものが組織され、協力して相互の生命と財産の保護に當り、戦場の後始末と事後の建設に堂々邁進してゐる現地支那の大衆を観るのである。この事情に對して我國內地の人々は、我國の状態を標準にして之を考へ、其早さと秩序ある行動に驚きの眼を見張つてゐるのであるが、之は眞に同情すべき支那興亡史の所産であつて、之を組織する彼等の心理状態も動作も餘儀無くされた過去の事實が斯くせしめたのである。従つて此種の動作に付いては既に經驗済みの事柄であり、所謂馴れてゐるのである。この點は支那の世相を知る上の重要參考資料として味ふべきものがある。

(六) 日章旗を樹てる心理

支那人は如何なる心境を以て日章旗を取扱つてゐるか、それは頗る興味ある問題である。凡そ皇軍の到る所―南は揚子江の船の中から―北は耕す農夫の傍らまで、日章旗の揚つてゐない所はあるまい、その揚げられた日章旗が一々親日の表現であると見る

事は早合點過ぎるのである、元來支那は國際關係の競争俱樂部といった様な立場に置かれた事情から、官衙其他民間に於ても、代表的な立場にあるところには全世界の旗が準備され、また内的にも各種雑多な旗が用意されてゐるのが常であつて、何れの方面から何れの者が來るにしても、其來る者の御氣に召す旗を揚げるのが保身的見地からと形式を尊重する民族性から習慣となつてゐるのである。その意味からすれば日章旗を揚げる事は第一日本人の御氣嫌を損せぬ様に、二ツには日章旗の翻るところ亂暴な支那人が近寄つて來ないといふ考へから、つまり惡魔除けの御守護様の様な氣持ちで日の丸を立てて居るのである、といった見方も決して無駄な見方ではないのである。しかし誠心誠意の旗で無いからといつて支那人を責めることは當らない、其因つて來るところを究め、然る後に理解せしめる様に導いて行くことが、東亞の盟主日本人の立場であり使命であることを心得てゐなければならぬ。

(七) 共產思想と皇化思想

上海の外南翔あたりの支那人はスツカリ皇軍を信頼して、敗殘兵が潜入して來ると直ぐに密告する、そしてその死體を埋める穴を掘つて待つて居る。こと程左様に皇軍を信頼してゐる彼等に對して「蔣介石が日本軍に捕へられ死刑の宣告を受けた」といつたら「そうですか、それは當然の事であります。幾百萬の人を殺し苦しめたのですもの」といつた調子であるが、これと對照的に山西の共產思想漲る地方では捕虜の彼等に諄々と其非を諭し、東洋平和の大理想を説いて聞かせても斷乎として轉向を拒む「それなら死刑にするぞ」と日本刀を突き付けられてもヘラ／＼と笑つて、しかも「一刀兩斷せよ」と首を差し伸る、これが「火會」と稱する共產グループのメンバーであるので、これ等の輩を始末するには相當な困難を要するものと覺悟しなければならぬ。

この種の輩が我等に抵抗する時、鐘や太鼓を打ち鳴らし「殺罷！殺罷！殺せ殺せ」と関をつくつて押寄せて來る流石に物凄い光景だ、思想戰の重要性がこの邊にも考へさせられるのである。

こうした未教化に對照して滿洲を観ることは眞に愉快である。確か二月八日と記憶

する。北京の某司令部に蒙古軍から故郷へ戻る滿人青年が用辨に來た、恰度通譯が不在なので余が代つてやつた。彼等が蒙古服を着てゐたから、最初に「君達は支那語が判るか」と呼びかけた、これに對して「我等は滿洲國人であるから、支那語は判りませんけれども、滿洲語なら判ります」昂然として答へたのである。決して上手や飾りでは無かつた。青年の血は漲つて見える、支那語と滿洲語とは大同小異、發音こそ訛りがあるけれども殆ど同體なのである。それを嚴然と區別した青年は、滿洲國人としての不動の信念と誇りとを持つてゐたのである。彼等青年が滿洲國の中堅となる近き將來に、一層頼しく力強い友邦の發展を想はしめるものがあつた。

(八) 支那兵に對する認識の是正

「私の親父は日露戦争の金鵝勳章組でありませんが、私が出發する時清國郎チヤンコロに敗けてたまるか、横ズツポの一ツもブン殴ぐれば直ぐに降參する」と教へられて來ました。ところが支那兵の強さはなかく馬鹿になりませんよ」これが中支戦線無錫で聞いた一兵

士の物語りである。日本人の頭には日清日露の役に用ゐられた「清國郎チヤンコロ」といふ言葉が先入主となり、しかもそれが弱いといふ代名詞の如くに考へられてゐる。そして今度の戦の初期にもそうした觀念を以て支那を解釋してゐた向も少くはなかつたのであるが、これは恐るべき時代の錯誤である。然らば現代の支那兵は如故に強いか？素より武器が歐米先進國から供給され、精銳を誇つてゐるのも其原因の一つではあるが、主なる原因は、血で血を洗ふ革命を目的とし、學校教育と行政機構に依つて抗日思想を統一した結果に依るのである。其上彼等が住み馴れた地の利を有し、衣食の便を持てゐる。更に彼蔣介石が中央に地方に命令して最近五ヶ年間を要した、天嶮と地物を利用して化學の粹を集めた陣地の構築、そしてこれ等の具備した諸條件を活動せしめる爲に養成された、蔣介石に直屬する軍官學校出身の將校、彼等は眞紅の布に銘書する誓の御守護りを口に含んで一直線、傍見もせず抗日戦線へと突撃して來るのである。時代の變遷を無視して弱い支那兵認識そのままの認識であるならば、第一線に働く將士達の苦勞が判らなくなる。それは銃後の國民として許されない缺點である。銃後の

國民は支那兵に對する認識を是正して戰地に於ける實際を掴み、而して第一線の將士に感謝しつつ、激勵と應援とを續けて行かねばならないのである。

(九) 日本人がつり上げる物價

日本人の行くところ必ず物價が騰貴する、第一は人力車の賃銀だ、人力車を滿洲では洋車ヤンチヨオ、天津では膠皮チヤオビ、上海では黃包車ホワヌパオチヨオといつてゐる、需要より供給の多い支那は何處に行つても人力車の賃銀は五錢八錢十錢等々、例へば「オーイ」と車を呼ぶ、五月蠅い程集つて來る、客は「三個兩毛錢 三臺二十錢」といつた風である、ところが日本人は支那の社會を知らず、日本と比較して安價に驚いて「日本ならなア……」等と考へる、それを感付いてゐる車夫は高價で出る、銀貨を出せばつり錢が無いと答へる、そこで日本人は「エー面倒臭いヨロシ」とやつて終ふ、これが支那經濟を知らぬ日本人が自ら物價を上げて行く現象なのである。日用品を買ふにしても、野菜市場に行くにしても皆なこの式で釣上げて行く、もつとも言葉が完全に通じない不自由から

來ることでもあるが、支那に志す人々の第一番に研究すべき重要問題の一ツである。

(十) 略奪の跡を見る

「略奪は支那兵の役徳だ」とは誰がいふともなく相場付けられてゐるのであるが、今度の戰線に於て其被害の最大なるものは濟南と青島であらう、濟南は公安局の巡警が一番先に良い物から略奪を始め、その次は野次の民衆、その次は乞食の部類と各々其分相應な略奪振り、甚だしいのは土臺石迄持つて行つて終つたのであつて、慘狀眼も當てられない光景である。青島は紡績工場が甚大な被害の第一である「よくもこれだけやつた」と驚かされたのであるが、この破壊工作は請負でやらせたとのことである所々に残る屋壁に翻る日章旗は暴逆非道の支那兵を睨むかの如く威壓するかの如き感じがする、大和ホテル方面の日本人家屋が荒されてゐないのは、當時獨逸の義勇兵が盟邦日本に對する友情から、全力を擧げて護衛してくれたとの事である、我等は獨逸魂に對して最大の敬意と感謝とが湧き立つ胸を押へることが出来なかつた。略奪に就

て異様に思はれたことは、何處の家にも籠城の爲に用意された梅干だけが無事なことだつた、日本人ならば戦時に無くてはならぬ梅干が、支那人からは鬼門扱ひにされてゐることは實に面白い對象である。

(十一) 日本語熱

太閤秀吉が遠征する時「漢文を解する者を従ふべし」との献策に對して、太閤は「我國の言葉を用ゐしむるのみ」と、献策を退けてしまつた、或はいふ「外國の言葉に上達する者は亡國の民だ」と、それは兎も角として日本人位外國語覺えの惡いものもあるまいではないか呵々……、近時全支那に漲る日本語熱は身分の如何や老若男女の區別は無い、雨後の筍の如く掲げられた日本語教授の看板に集る人々は、咲き出る花に集る昆虫の如くである、汽車の中、宿屋の部屋、物賣りの店、或は行違ふ日本人に對してまで寄ると觸ると日本語の練習が話題の種となつてゐる、支那人に取つては生活の活路を開かんとする懸命の希望であり努力であるのだ、我等は熱心に懇切に善意

を以て指導してやらねばならない、言語の延長は國力の延長であると共に、言語は相互融和を取り持つ用具である、苟も下らぬ悪口や下品な言葉を慎まなければならぬ、この點に就て現地の同胞に對し余は勇敢に警告する。

戦地より銃後の國民に語る

(一) 強敵無水

日本人は山紫水明の國に生れ水に恵まれ過ぎてゐる。従つて飲料水の困難を知つてゐる者は海軍生活を経た者か、海員生活の經驗を持つてゐる者以外には無いといつても差支はあるまい、水に對する困難を知らないから感謝を知らない、この日本人に對して今度の事變が痛烈なる教訓を與へたのである。支那に「百年河清を待つ」といふ言葉の有る如く、所に依つては滾々と清水が湧き、或は清流のせゝらぎ戦ぐ風光、或は明鏡の如き淀、舟を浮べる詩作の清淵も多々有るにはあるが、北支の廣野も中支の

平原も、流れるものは黄色油の如き泥水であり、溜るものポーフラの宿る錆青色に淀む汚水である。井戸は有つても皇軍の兵馬が需める渴を醫すべくも無い、その僅か二三の井戸ですら、敵は退却に際して細菌弾を投げ込む、戦友の死體を放り込む、到底用ゐることは出来得ない、或將校が「彈丸は覺悟の前だから恐しくは無いが、全身の水分が切れて倒れる、これが恐るべき強敵だ」と語つたことがある。全く其通りだ。日本の國民には對水訓練の必要がある。今後とても遭遇しなければならぬ運命的な無水の敵に對し、青年學校あたりで訓練することも將來に備ふる一策ではあるまいか。

(二) 慰問袋

慰問袋が取り持つ一線と銃後の感激等に就ては今更事改めて書く必要もあるまい、余は慰問袋の作り方に就て所感を述べて見る。

イ、慰問袋を作る場合第一に考慮すべきことは、輸送期間を含めて到着する頃の季節である。極寒の陣營に扇を貰つたが、兵隊さん捨てることも出来ず、ヤケに机を叩

きながら「チエ浪花節でもあるまい」或は汗の吹き出る眞夏に眞綿のチョッキ「こいつア手拭にア有難過る」といつた様なことでは折角の心盡しが届かないことになるから、この點は十分注意を拂はなければならないと思ふ。

それにつけても内地の人々は戦地の總てが只寒いとのみ思つてゐる様だ、新聞も又寒い様な記事と寫真で埋めてゐる、この考へ方は滿洲といふことが先入主となつてゐるからであるが、滿洲も北支も中支も我軍の居る範圍は、何れも面積に於て日本の二倍宛であるから合計六倍の大きさになる、それを一樣に考へることは臺灣に居る人に對して北海道向きの送り物をする様なことになるのだ、だからこの認識から改めてかゝらねばならない、先日北支南部の戦線で某將軍と大笑した、兵は日中作業をするとき上衣を脱いで汗みどろになつてゐる、そこへ来る手紙も来る手紙も一樣に「極寒零下幾十度骨刺す様な寒さの中に御奉公御苦勞様」とある。クスグツタイ様な感じがするといふのであつた。

今我軍戦線の範圍にある中部支那以北は、我國の様に春夏秋冬が順序よく變つて來

るのでは無く、冬から夏へ夏から冬へ、春と秋とはほんのしるしばかり三旬内外の日數で過ぎて行くのである。それに今一つは山岳地帯と平野地方と臨海地方とは常に不同の氣候である。そればかりで無く夜と晝とは内地の夏と冬程變るといふことも知つてゐなければならぬ。

ロ、慰問品には實用向のもの例へば襪、繻帶、銃の手入、マスク、ハンカチ代用、黄塵除け等に用ゐる晒木綿であるとか、鋼鐵製の陣中鏡であるとかいつた風のもの、精神的な慰安になる御守護様だとか、小學生の慰問文だとか、美人の寫眞だとかいふものと、煙火や菓子等味覺に屬するものとの三様に大別することが出来る。その選擇に就ては送る方々が最も苦心するところであらうが、これは貰ふ人と貰ふ場所とに依つて感じが異なる場合もある。即ち第一線戦に臨む頃の晒木綿は萬金に價するのであるが、後方に居る場合は晒が得難い品物であるといふ譯ではないし、酒好きな人にキヤラマルも一寸似付かぬ様に見える、しかしそれは貰ふ人達の間にも然るべくやるから心配は無用だ、銃後の人の眞心は何時の時も同じ嬉しい感情で、一人心に微笑みつゝ、送

つてくれた其人に對する想像へヒタ走りに飛んで行く、この嬉しい感情は、貰つたこととの無い人に百萬言を費してもおそらく理解は出來得ないであらう。

(三) 煙草

煙草を嗜まない人に言はせると「吸はなくなつて死ぬるわけでもあるまい」等と熱を吹かれるのであるが、吸ふ人の身になつて見るとそんな簡単に片付けられるものではない、「煙草も二人で分けて飲み」とは古い軍歌の一節であるが、前線の我等にはもつと深刻である。兵站から煙草を貰つて運ぶ途中、見知らぬ他の部隊に遭遇した「オ、オ、君は煙草を持つてゐるじゃないか、俺達は今日でまる二日の戦に疲れてゐるが煙草は一本も無いんだ、少し分けて呉れないか」斯う呼びかけられた自分も吸ふ身であつて見れば「嫌だ」とは斷れない、嬉しそうに吸ふ相手を後に暫く行くと又他所の部隊だ、「オ、オ」と來た、又分けてやらねばならない、本隊に戻つて見れば受取り數の半分となつてゐた。追撃戦が續く、食料は無くなる、バット一本に火をつけて一と吸

づゝの廻し飲み、その一吸の尊さ、戦友同志が互に遠慮して軽く吸ふ時の人間味、斯うして我等は煙草に助けられ、煙草に感謝しつつ戦つてゐる。煙草は戦時の我等を活かし、そして戦はせてくれるのだ、自由の人達よ！心して飲め一服の煙草を。

(四) 支那風呂

「明日は休みだから風呂に行かうよ」支那人の風呂は衛生の爲では無くて中流以上の娯樂である。通常風呂屋を「池」と稱し、追込みの浴槽を盆池と呼び、一人風呂を官盆と呼ぶ、支那人の風呂は一ト先づ入つて席に戻り、御茶を飲むでスヤ〜と眠る、覺めては入り上つては眠り、食事や酒を取り寄せて半日でも一日でも遊んで歸るのである。それで料金は地方に依り、或は風呂屋の上下に依つても違ふのであるが、普通が三錢位から十錢位まで、官盆が二十錢位から四十錢位まで、それに全身の垢を擦る流しが大概十錢である。

我軍の居るところの支那風呂は概ね我軍に利用されて、しかも支那人は大喜びであ

る。何故？入浴料は支那人從來の半額位でやつてゐるのであるが「日本兵隊さん風呂、入る上るそれ早い、三百人四百人一時間二時間済む、半額それ儲かる」大黒さんの様な笑顔して御世辭半分喋つてゐる。風呂に入らねば氣のすまない日本人、この兵隊さんの入浴、想ひ思ひの話しに花が咲き、かしくもこゝも笑顔の陳列、片言混りの支那語と日本語、この入浴は戦地の將士に無限の慰安を與へてゐる。

(五) 勤務

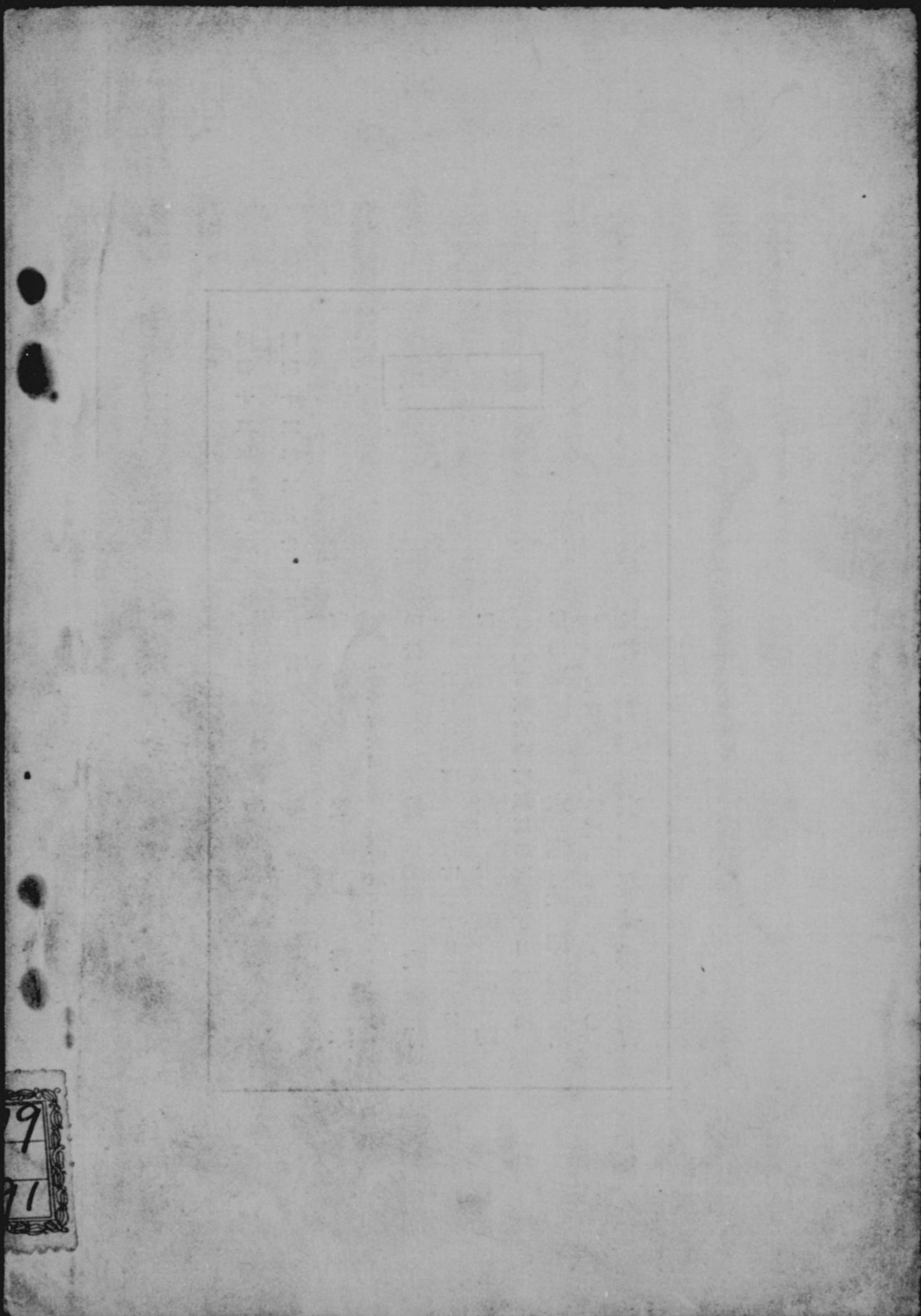
「國を出る時萬歳の嵐と旗の波に送られて來たのであるけれども、不幸にして未だ彈丸の音を聞いた事も無ければ砲煙彈雨の下に華々しい戦の土産話しの種も無い、どう云つて國に歸らうか、残念だ！」これが後方の配置に就てゐる兵達が異句同音に語る嘆きなのだ、この兵達の心を思ふと何んとかして一線に出す方法が無いかしら、同じ同情が何時の場合にも湧いて來る。しかし考へて見れば彈丸撃つばかりが戦争では無いのだ、一人一人が命ぜられた尊き任務を果すことに依つてこそ戦は勝つのだ、或一つ

の事が成功するには表現せられたる活動の裏に必ず縁の下の力持ちとか俗に云ふ、眼に見えぬ人々の力が基礎となつてゐるのだ、炊事場の火を焚く事も靴の修理をすることも御奉公に何んの變りは無いのだ、日本男兒と生れたからは、殊に戦地に出たからは、誰も彼も華々しく戦つて譽を千古に残したのいだ、希望は一ツ役目は無數、己が任務を果すことそれが華々しい戦ひなのだ。或は占領後の停車場に或は平和な後方の部落に勤務する身は想ふであらう。想が千々に走ることとは人の情の常である、餘暇の有る身の寂寥を託つてはならない、銃後の國民は尊き使命と任務とを果してくれと願つてゐる。「健康を害すな健在であれ、國に捧げたその體、辛い勤めを頼むぞ」と朝な夕なに神や佛に祈つてゐる。「心と力の續く限り祖國の正義を貫くまで、どうか辛抱してくれ」と心の底から信頼し聲を限りに叫んでゐるのだ。この國民の叫びは物想ふ頃の將士の耳に聞えて來る筈だ、「以心傳心」心を叩く無言の激勵、これぞ我等日本人の心に潜む大和魂の躍動である。

昭和十三年三月二十日印刷
昭和十三年三月廿五日發行

不許複製

著者 後藤 蒼洋
東京市世田谷區松原町三丁目九百五番地
發行者 後藤 政行
東京市麴町區飯田町二丁目一番地
印刷者 鈴木 鐵之助
東京市麴町區飯田町二丁目一番地
印刷所 六洲社印刷所
東京市世田谷區松原町三ノ九五〇
發行所 支那事情研究會



9
11